きびのさと
NO.50
月刊
第四輯 戰爭篇 山陽六号
昭和廿七年八月一日 発行 （非売品）
発行所 岡山県都窪郡昔備町東町一二五、宇垣方
吉備観光協会
印刷 3千部

水島の合戰（その二）

赤旗を舷じるにした平家の軍船に追いまくられた源氏方の兵船は、ジリ〳〵と東の海上へ押しやられた。折柄晴れ渡っていた空が、俄かに、うやみとなり、西軍の旗じるしも見分けがつかずバラ〳〵乱れ敗走の源軍は今更のように固草踉蹌した。これは太陽が月に覆われて日蝕になったのじあるが、源軍でわその天文の原理を知るものは少く、平軍は豫め知っていたので、少しもあわてず攻撃の手を緩めず、鋭く追撃に移った。義清は舷側に立って全軍を指揮していたが、舷の動揺で、いたたまらず鎧さとって舟端に腰をおろして身軽のまま太刀を扱いていた。その姿を見た寄手の大将盛次は急いで舷を漕ぎ寄せて乗り移り、甲を傾けて義清に切りかかった。義清は立ちあがって体をかわし、盛次に真向から打ちおろしたので甲の鉢が毀れて舷中にどっと轉げ落ちた。その瞬間に盛次は目がくらんで無意識に振った太刀の刃先が義清の右の肩先き筋違に切りつけたので、義清は力が抜けて持っていた太太刀は手から離れて沖に飛び、ついに海中深く沈んでしまった。かくて舷底へ打伏せになって倒れた。盛次はすかさず、追み寄って脛筋を引き起し首を刎ねた。

舷の軸に立っていた幸廣は盛次の振舞をみて義清の敵を打たんと、あげ巻きをとって引返し盛次を生捕んと組みかかったが、足をすべらして二人とも抱き合ったまま倒れた。幸廣はすばやく立ち上って盛次の鎧を左足で踏みしめ、草摺を引きあげてついに打ち取った。景家は三十米ほど距てた所にいたが、舷を漕ぎ寄せて飛び移り、幸廣に打ってかかり首尾よく甲を掴んで仰向にして首を落した。

平軍は追撃して陸上の戰いに移っても撤底的に殲滅せんものと、豫め準備した第二陣の船団は鞍と馬を舷に乗せていたが、海上の戰いにかくも決定的大勝を得たので渚に舷橋を架けて馬などを陸揚げして舷足を軽くし、能登守教経を大将として新手の應援船隊を繰り出した。この教経は弓術の名人として誉れ高く、射出す矢は一本の無駄もなく、敵将薗潛ノ二郎隆直を始めとして十二人を海中へ射落した。敵味方ともこの有様をみて賞讃しないものはなかった。源船は大将級が相次いで打たれてゆく敗戰に、面をあげて戰ふものは少ない。深手を負って海中に溺れるものを援くるものはなく、元氣な舷端に手をかけて救いを求めているものさえも見棄てて敗走した。

この合戰は卯ノ刻（午前六時）から開始されて午前中四時間程の短時間で勝敗は決したのである。源氏方の損害は夥しく千有余人は海中の藻屑となり消えうせた。平軍方の將士の志気はいやが上にもあがり、軍船の補裝と糧食の準備、軍事訓練に怠りなく、前進して福原の都へ帰ったのである。

この時源氏方では鎌倉の大御所源頼朝と義仲との間に仇讐を生じ、義経、範頼の大軍は上京して義仲を亡ぼし、ついで平家追討の軍を起して西下する。一ノ谷の戰、備前の藤戸の戰（別項参照）讃岐の屋島の戰にうつるのである。

地名考証（萬寿城跡）

義仲の勢揃した萬寿城跡は山陽線が城跡の中央を東西に横切って走り、その上を国道二号線が南北に通じている立体点の丘陵である。現在城（じょう）という地名が残っているだけで何の遺蹟もないが、突出した一小丘で東西の平野が展望される。

乙島（おとしま）

玉島湾の東に幡まる丘陵一帯の地名で、昔は一島鴨であった。古名は戸島で、南禁に伊弉冉命外七柱を祀る戸島神社がある。これから起って（とじま）、（おとしま）に轉訛したものと思われる。玉島市街などは当時海面である。これは萬治元年に松山藩主であった水谷勝隆父子が港を開拓したのである。この乙島の北西に小丘がある。これを俗に「城」と、いっている。西の玉島港を隔てた柏島の満竹（まどころ）は往昔郡名を間人郡（まんど）と稱えていたので、これから起ったという。玉島湾は往昔は水島の途（みちすじ）といい、南北の海に通じていた。山禁は昔海岸にして東から南へかけて山続きとなり、東北には僅かに入海の形をなし、大小の舩舶が停泊した所である。城の地にはいまも台宗瑞璃山海岸寺常照院の寺坊がある。養和年間に慈覚大師の創叡と傳えている。この寺はもと井の浦にあったが、源平の合戦に兵火にかかり、ここに移したのである。この位置が平軍の陣営を置いた處で、戦国時代には亀崎城主赤沢兵庫が舊跡を利用して城塞を設けた古城跡でもある。西側に面して古い石がきが遺っていたが、寺院建立の時に全部取除いてしまった。古城跡の構造は東の窪地から、南に接する緩かな山間を辿って登る道が大手にして西と北は急な山肌となっている。

この水島の海上戦をいまの内海の孤島、上水島、下水島（備前、備中の堺）を舞台として行われたように通説しているが、これは乙島を中心として攻防戦が展開したのである。何となれば当時の幼稚な和舩と武器によって爭ふのにはあまり海上の場面が広いように思はれる。まして平氏方の兵員何千人という将士を駐屯し得るような島嶼に適していないし、また糧食の補給などから考えて陸上からの距離があまり遠く運送に困難なことである。ただこの沖合の海上をおおまかに、水島灘といっているので水島がある所からこの島を中心にして戦ったと口傳されたものと解される。最近高梁川河口が埋立てられて水島という地域が新しく生れて偶然にも古戦場を語るに相應しいことになった。

これ平家の本陣を屋島において、また関係上、内海の制海権を確保する上には、本土との連繋を緊密にしなければならないので、絶えず備兵をこの水島に配置して舩舶の監視と、舩路の警戒を厳重にしていたであろうことは首肯せられるのである。

ここで木曽冠者義仲の最期について筆をとることは無駄ではあるまい。義仲は源義賢の子で、義賢には兄に義朝、弟に為朝（鎮西八郎と共に保元の乱に破れて伊豆の大島に流された）がある。始め義賢は義朝の子、悪源太義平と領地のことで爭ふて討たれた。時に義仲は僅か二歳であった。父と共に殺される所であったが、斎藤別当実盛に救はれて密かに木曽山中に遁れ、ここで中原兼遠というものの妻に育てられた。その中原兼遠の娘が女丈夫として有名な巴御殿で、その兄が今井四郎兼平である。義仲は長じて以仁王から平家覆滅の令旨を受取り、五万余の挙兵を以って破竹の勢で京都にのぼったが、部将を始め諸兵は皆な北国育ちにして粗野な性格の上に殺伐なことをしてきているので、文化の発達した都へ入って、みさかいもなく乱暴を働いたので、その行動は朝野をあげて嫌われ、却って平家を望む聲さえ起った。そこで後白河法皇は平家追討の令を下して、一先ず京都を去らしめ、密かに鎌倉の源頼朝に上京を促したのである。義仲は命を奉じて箇中さかいまで進撃したが、京都の異変を聞いて平家と結

び、連合軍によつて頼朝と対抗せんとしたが、平家はこれを拒んだのでやむなく都へ帰り、宇治川を挟んで義経・範頼の軍勢と戰つて破れた。この合戰で佐々木四郎高綱と梶原景季と先陣争いをしたことは周知のことと思ふ。義仲は主従十三騎と共に本国信濃の国へ逃走の途中、近江の国粟津ケ原で追兵のため討死した。時に三十一歳であつた。墓は大津市の義仲寺にある。義仲が寿永二年に都へのぼり天下を掌握したことも半みつたが、その翌三年には失脚したので世に義仲を想将軍というのである。（寿永三年五月京都に入り、翌三年一月廿日討死す）。

追走の十三騎のなかに、ただ一騎の女性があつた。これが有名な義仲の寵愛する巴御前である。巴御前は丈にあまる黒髪を後に垂れ、白鉢巻きをし、紫格子を着、直垂に菊織をしげくしく萠黄縅に蓮鍬芦毛の駿馬に金覆輪の鞍に跨がり、三尺五寸の大太刀をはき、追撃してくる畠山重忠の軍勢を蹴散らし、二十人力といわれる内田家光とわたり合つて、その首を掻き切つた女丈夫である。巴御前はこの時芳紀まさに二十八歳であつた。

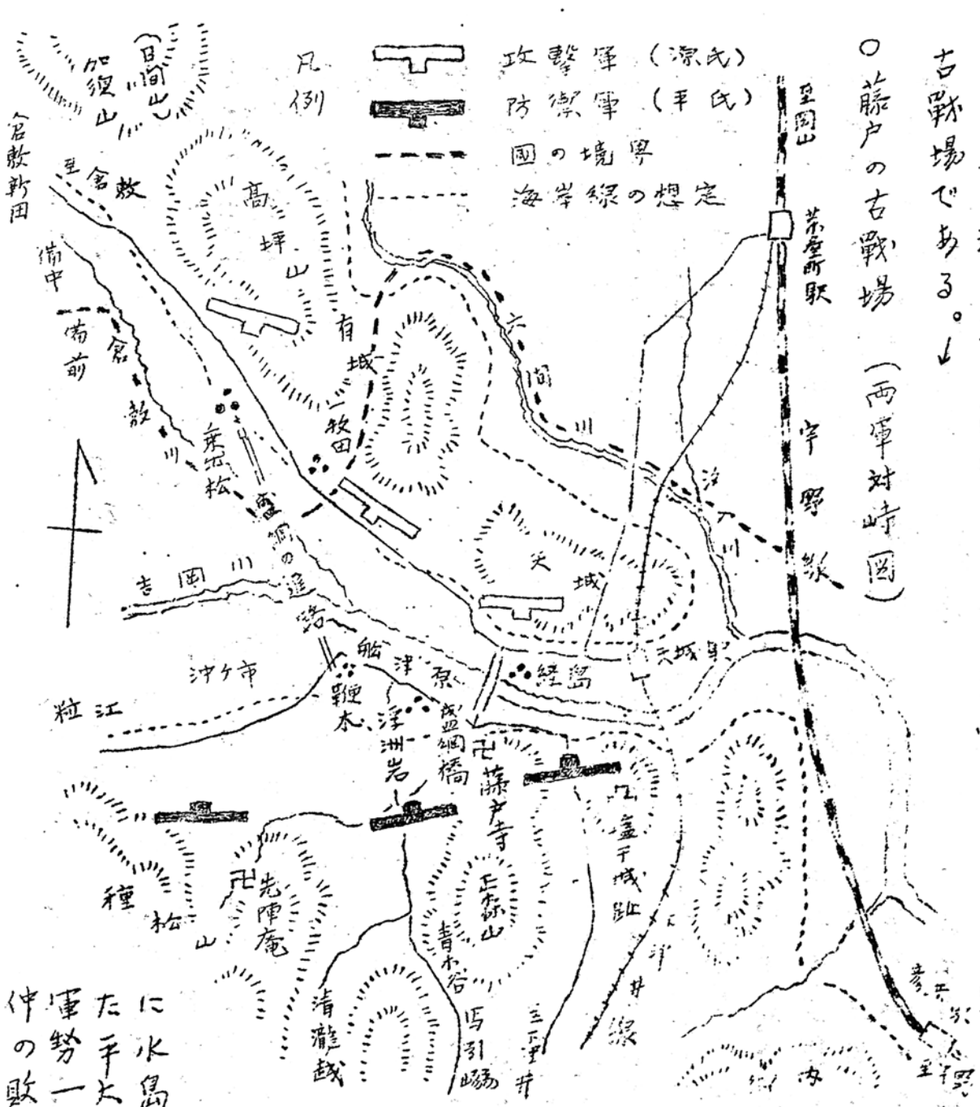
○藤戸の合戰

謡曲「藤戸の渡」の冒頭に、「春の潮の行末や、藤戸の渡なるらん」とは現在の倉敷市藤戸のことにして、いまは菜田後野となつて、僅かに小流が貫流する地形になつているが、往時は南と北の山裾は海岸線を引き、海水が瀰漫して水島灘と児島湾を貫通する備前、備中の国境であつた。児島が完全な一島嶼であつた昔は、藤戸海峡といい、東西を航行する船舶の要路にあり、藤戸の沼として栄えた處である。

春の潮とは、現在岡山市平井の潮の田名にして、往時藤戸の泊（とまり）と同じく船舶の寄港地であつた。（宇喜多秀家が備前の大守となつた天正の頃、春の潮の地名は長

過ぎるというので、単に潮に改めたという説がある）。この藤戸の海峡を舞台として寿永三年の暮、源三河守範頼は児島に陣営する平左馬頭行盛の軍勢を撃退した古戰場である。↓

○藤戸の古戰場（両軍対峙図）



この合戰で有名なことは、源軍の部将佐々木三郎盛綱が騎馬によつて海峡を先陣したことと、自己の高名をあせんがために、海峡の浅瀬を教はつた浦の漁師を無惨にも斬殺していることである。

○戰前の情勢

先づ合戰の本旨に入る前に、源平両軍の動静について説いて置きたい。寿永二年の十一月に水島の海戰で勝ち誇つた平大将知盛、同重衡は軍勢一万余騎を率いて義仲の敗走を追跡し、播磨

の室山に至って合戦し、敵の首級八十余をあげた。屋島の本営では特兵挙って捷報を祝い、年歳の後ちには福原へ戻った。これも東の国々あった。東国に起った源義経・同範頼は同族の義仲を破って京都へ入ったことは、すでに述べた通りである。久しく義経は更に後白河法皇から平家追討の院宣を賜はり、その精鋭をむかって大挙、福原を襲撃したのである。義経の将兵は長駆して山陽道の難所を下り、急に平軍の背後を突し、主力は大手の生田ノ森で範頼の軍勢と激しく戦っていたが、腹背を衝かれて混乱に陥り、兵庫久方面から須磨の磯傳いに退き、隊伍用意していた軍船に分乗して沖へ逃れた。（この一ノ谷の戦いに一隊の悲劇がある。源氏の部将熊谷次郎直実が須磨の浜で、軍船に乗り遅れて単騎のまま、海上にのがれる一武者を呼び返して、波打ちぎわで組み伏せ、首を刎ねようと甲を押しのけて見ると、顔に薄化粧をし、はぐろをつけた（歯を黒く染めること）年の頃十六、七歳の美少年である。ゆゑ子ほどのものながら、「名を名乗れ」。というと、「早く首を切って高名をあげよ。知る人もあろう」。と、若さにも似ず、落ちつき払った気品の高い声晴れなる大将振りである。直実は助命せんとしたが、続く味方の勢いに星霜もなく、波をのんで打ち取った。これぞ平清盛の庶、経盛の三男で、無官、大夫敦盛の哀れな最期である。直実は戦いが終って出家の無常を感じ、出家して法然上人（浄土宗の開祖で久米郎の人）の弟子となり、名を蓮生坊と改めて生涯を念仏に仕へたのである。）

久くて平家は海上を漂い、屋島へ落延びた。源氏は義経を西海に範頼を山陽道に、海陸にわかれて追撃した。平家が屋島を根據地に定めるには、戦略上山陽道を見捨ててはならない。そこで先ず嘱望したのが、この児島である。児島は内海を隔てて屋島と最も接近しているので、防禦上当然占據して置かなければならない重要な地形にある。

○

両軍の陣営位置

屋島に退却した平軍は常に京都恢復に努め、機会を窺って前進せんと、先ず大将左馬頭行盛を始めとし、飛騨守景家以下の兵船五百余艘にて児

島の地へ上陸した。当時の地勢は巻頭に書いたように、藤戸海峡は最も本土と接近している箇所で、鳴戸海峡と同じく相当潮流の急な所である。が、船は殆んど外海を航路とせず、この沖合を満干によって東西した。と思える。故に平軍の児島を占據するや、下津井に船を下りたものと、水島灘から迂回したものとの味方が、この藤戸に集結し、源軍の攻撃に備えたのである。

一方源三位守範頼は播磨の室津港に滞在すること数日、戦備を整へ、作戦計画の満全を期して、主力部隊は威風堂々と山陽道を西下し、備前辛川から進撃して備中に入り、足守川を渡渉して万寿庄（庄村地内）を経て倉敷市の西南に当る加須山（日向山）高坪山の高地を辿って、藤戸海峡に迫った。総勢一千余騎で従ふ部将は畠山重忠、和田義盛、三浦義澄、土肥実平、佐々木盛綱、工藤祐経、土佐坊昌俊などの勇者である。また一部の支隊は平家物語に「西大川尻に軍を駐めた」。と、おおまかに記述しているが、西大川はいまの旭川のことにして当時の川尻は岡山市内になり方角からして全く違っている。地形上笹瀬川の川尻に当る、いまの花尻あたりと想像して間違はないと思ふ。ここから泥海に沿ふて左翼部隊が当面の敵兵を掃蕩しながら妹尾、早島の沿岸地帯を南下して藤戸の本隊に合したようである。文化年間に庭瀬の溝渠から平舟の埋没したものを発見したことがある。その舟底から武装したままの溺死した人馬や、土器が出てきた。また妹尾沖合では鎧を着けた乗馬の溺死体を掘り出したことがある。このあたりで源平以後合戦した文献を見ないので、源平時代の戦没者ではないかと考えられる。別項でしばしば書いているが、当時の備中の国は平家無二の味方にして、小部隊の戦闘が行われたものと信じるのである。

⑨ 花尻は蟐尻から起り蟐尻は川尻（海に注ぐ流）から起った地名であろう。

さて平家の陣地をみると、藤戸寺の後方にある屏山の丘阜に主力を置き、青木谷、清瀧越から正森山、箭地蔵附近に後方部隊を配置し、塩干、船津原、沖ヶ市に亘る海岸線一帯に茅一線を敷いて、敵軍の上陸阻止に水も洩さぬ警戒をしたのである。

○ 両軍の合戰の狀況

十二月廿五日の朝、東がしらむと平軍は海を隔て攻めてこい」。と招いた。これをあげて源軍に向め、「勇気ある者は海を渡って攻めてこい」。と招いた。源軍は源軍に船がないので渡ることの出來ないのを罵倒した言葉である。源軍の將士はこれを聞いて腹を立てたが、渡る術もなく唯同じように扇子をあげて招き合ふのみで、其の日はついに暮れてしまった。夜は敵、味方とも篝火を多く焚いて威勢を示す位のことであった。ここに源軍の將佐々木三郎盛綱は遙かに児島を眺め、向ふ岸までは二町程（二百米）に過ぎず、必ず瀬の筋所があるに相違ないと、夜の暮れるのを待って陣営を出て、海岸を巡察していると、一人の浦男に出遇った。盛綱は呼び寄せて、「われわ向ふの藤戸へ渡ろうと思っている。馬で渉るような浅瀬はないか。知っているなら教へよ。さすれば汝にこの白鞘巻の太刀を進ぜよう」。といった。浦男は答えて、「それは、いとやすいことで御座います。私しわ常に此浦に住んで、よく深浅を知っております。瀬には二ヵあって、月の頭には東が浅瀬になり、これを大根の渡と申します。東西の瀬の間は二町ばかりで、その瀬はどちらも二段（一段は六十間）はありません。その瀬のうちに一箇所深い處があり、浅い處は波の音が高く、深い處はどのようにして知るのか」。と答えた。盛綱は重ねて、「その瀬の深い處と、浅い處は低ふ御座います」。と答へ

九

ば、浦男は「浅い處は波の音が高く、深い處は波の音が高く、深い處は低ふ御座います」。と答へた。盛綱は「されば余が流れに入ってそれを確めんと思ふが案内するか」。と、すぐ眞裸になって眞先に進んだ。膝までの浅い所もあればすぐ手の脇までくる所もあり、深い所は耳までぬらすほどである。向ふ岸に着く手前で、浦男は「これから向ふの島へは、もう次第に浅くなって御座います」。と教えた。盛綱はうなづいて、もとへ引き返し、陸に上っていうには「誠にありがたい。これで浅瀬はよく判かったが、明日その道筋を知る方法はないか」。と、「それは小笠をきって要所々々にたてて置けば、便利で御座います」。と、そこで盛綱は浦人の言に従って小笠を切り集めさせ、浦人は喜んで再び海へ進んでゆく。

日印に笑き差さした。そしてその恩賞として尚も直垂一着を授けた。浦人は陸から遙かにこの姿を眺めた盛綱は、明日の先陣の功名はわれであると心窃に喜んだ。が、レタレ、若しこのことが後日味方のものに知れたなら、我功名は何の益もない。よく浦人にいい置かんも、眼しい身分のものであるから家臣にすることは出來まいであろう！！！。この恩人、浦男を取り立てて長く家臣にするか！！！。さもなくば此場で一刀のもとに切捨てようか！！！。盛綱は月景の薄い汐辺の岩に腰をおろして思案にくれた。

やがて浦人は盛綱の意の如く目印の小笠をつき差して盛綱のもとへ帰えってきた。盛綱はフト立ちあがり、ものあもいわず衣れとは思った刹、閃光すると、ぐくと刀のもとに浦人の頭を刎ねて海中へその死骸をなげ捨てた。

明けるとせ六日、早朝から平軍は昨日のように小舟に二、三人と打ち乗って渚を離れ、源軍に向って扇子をあげ、「ぐくじのない源軍ぢやー！！！渡れよノ、ノ、ノ、ノ！！！！」。と罵言を吐いていた。ここに盛綱は黄生衣の直垂に緋威の胴、白星の甲、蓮錦葺毛の駿馬に金覆輪の鞍を置いて乗り出した。これに続

いて家臣の知比八郎、小林三郎の猛者を初めとし、郎党重田源太等十五騎轡を並べて海の中へ颯と打って出た。三河守範頼は高地にあってこれをみて驚き、「馬にて海を渡るものは誰れだ――」。「やあ――佐々木を制止せよ」。と叫んだので、土肥、梶原、千葉、畠山などの部将は走りいで、「佐々木殿――無謀ぢゃ――返せよ――」。と大音聲に叫んだが、盛綱は聴て渋顔を知っているので、その聲も耳に入らないような振りおして悠々と海を渡ってゆく。小笹を目当に波が馬の鞍を洗う位になった處から、馬を下り轡を取って共に游いで進み、向ふ岸に近づくに従って次第に渋顔になってくる。盛綱は物具に身を堅め、岸にあがって大音あげていうに。「今日海を渡って敵陣に進む大將軍おば誰れとか見ん。我こそは宇多天皇の皇子、一品式部卿敦実親王の九代の孫、近江の国の住人佐々木源三秀義の三男、三郎盛綱なり。手家の方にわれと思わん者は、文將も侍も落合い組めやり――――」。とわめいた。この有様を眺めた範頼は、「海は思いもよらぬ渋顔である。佐々木を討たすな。全軍続いて進めよ」。と命令を下したので、土肥、畠山などわれ先にと五千余騎の軍勢は、その道筋をたよりに敵陣目蒐けて突進じた。手軍は扇子を振って度々招いていたが、かく渡ってくるかと思っていたが、さすがに海であるから如何にして渡ってくるかと驚きいた大將宗盛は陣を進めて自押し寄せてきたので、陣中は不意の攻撃に驚き、沖ケ市の海浜に迫ってするどく白みから先頭に立って采配をとり、舷津原、沖ケ市の海浜に迫ってするどく白兵戦を演じた。遠いものは弓箭を用い、近いものは熊手を振りあげて相方入乱れて斬り合った。海上にては源氏方の小林重隆は平家の加部源次と馬上で格闘し、共に水中に墜落した。小林の家僕に黒田源太というものがありこれをみて馳せ参じ、主を救おうとしたが両人とも海底に沈んで判らず弓をもって海底をさがすと海底から弓を掴んで浮ぶものあり加部源次にして、重隆は彼れの腰部を掴したまま陸上に引き上げられた。重隆は大刀を抜いて源次を斬り殺した。かゝる大接戦に防禦軍は猛烈な攻撃に堪え兼ねて漸次退却を開始し、準備していた舷津原、塩干附近に繋留の軍船に乗りて弓箭をもって源軍の追撃を防ぎつつ海上を東に敗走した。源軍は海岸に迫って追討したのみで、軍船がないため海上の攻撃を中止した。また一方主力は清瀬越を経て広江方面に逃走したが、これ亦深入りせずして止め、源軍は再び海を渡って帰陣し日岡山の根據地に引き揚げたのである。

三河守範頼が全軍をして思島を徹回して、日岡山に退却したことは作戰計画によるものである。それは戰線に補給すべき軍需品、兵糧などの運搬に適当な兵船の準備がないことによるものである。この日岡山は小野小町の傳説で有名な法輪寺の古刹がある。その山麓に当時源軍の輜重部隊の駐屯地や馬を繋留したと推定せられる遺蹟がある。ここでは割愛する。（おわり）未完

吉備町本町
矢尾歯科医院
吉備局電話一七番

郡窪郡吉備町庭瀬二九一
吉備木工有限会社
吉備局電話一二七一五四番

吉備町平堅国道筋
トモエ葬儀社
吉備局 電話四四番